

3章 司書講習の試験の回答から

1. 日本の図書館の課題とこれから

はじめに

司書講習の科目の一つ「図書館概論」の期末テストでは、下記の設問を設けた。

司書講習を終えて図書館員になった際に（既に図書館員の方は、司書講習を終えた際に）、自身が働く図書館でどのようなことに注力すべきだと思うか、自身の考えを述べて。回答の流れは、図書館の課題を挙げた上で、その課題に対処するためにどうすべきか（自身が働く図書館でどのようなことに注力すべきか）を具体的に回答すること。なお、回答中には授業中に紹介した課題や事例を1つ以上含めること。

以下では、この設問に対する回答として、Y氏、宇江氏、大谷氏、山口氏、幸野氏、堀氏のものを紹介する。いずれも現在の図書館が持つ重要な課題を捉えており、また、それらの課題に対してどのようなことができるかをよく考察した内容になっている。現場の図書館員からすると実現が難しい面もあるだろうが、もし図書館員になったらぜひ実現に向けた検討を行ってもらえれば、図書館がより良いものになるだろう。以下、簡単にそれぞれの回答へのコメントを述べる。

Y氏と宇江氏の回答は、デジタルデバイドに着目し、その解消のための方策を述べたものである。デジタル化が進む一方でそれらを扱えない人々が存在すること、感染症拡大に伴う技術習得の必要性の加速、資料の電子化・サービスのオンライン化が進む中での図書館の位置づけ、デジタルに疎い図書館員が少ない現状等の図書館内外の様々な課題に対して、図書館員としてできることを検討する優れた内容になっている。

大谷氏と山口氏の回答は「場としての図書館」に着目し、「図書館に来たい」と思ってもらうための方策を複数挙げたものである。「図書館は誰でも歓迎する」という姿勢を打ち出し、図書館の利用者を増やすこうした方策は、日本の図書館全体の価値向上に寄与する重要なものだと考えられる。「図書館は誰でも歓迎する」という姿勢を打ち出す図書館は全国にも様々なため、それらの館から良いところを吸収し、自館の運営に活かしてもらいたい。

幸野氏と堀氏の回答は、特定の利用対象者に着目したものである。幸野氏は特に赤ちゃんとその親に向けたサービスの課題と改善策を、堀氏は異文化サービス・他言語話者へのサービスの課題と改善策を挙げている。図書館は様々な子育て支援サービスに取り組んでいるものの、まだまだ利用を躊躇する住民もいるなかで、利用のハードルを下げることの方策を考えることはより良い図書館作りのために重要であろう。また、公立図書館だからこそマイノリティについて考えることは必須であり、堀氏はその視点から考察している点が素晴らしい。図書館員はその多くが日本語話者であり、他言語話者がどのような点をハードルに感じているかを理解するのは難しいものの、まずはこうしたマイノリティの存在を認識し、ハ

ードル解消に努めるという姿勢が重要である。こうした当事者を置き去りにしないような図書館員が増えると、様々な人にとって生きやすい世の中になるだろう。

(水沼 友宏)

日本の図書館の課題とこれから：受講生の回答

図書館における課題の内、オンラインサービスとデジタルデバインドへ、私が働く図書館は注力すべきである。

図書館はデジタル図書館やオンライン上でのレファレンスサービス、貸出受取等の様々なオンラインサービスを提供する。ただし、現状のままであればその利用者の多くはデジタル機器の扱いに慣れた世代のみに留まり、利用者は伸び悩むだろう。なぜならこれから増え続ける高齢者はデジタル機器でオンラインサービスを提供できるほど扱いに詳しくないからである。

そのためには、オンラインサービスの利用方法を教える「以前」にその機器の扱い方を教えるべきである。情報を扱う司書であればそれが出来るべき、かつそれを教えられるべきである。そうやって教育することで、初めてオンラインサービスの利用者を増やすことである。こういった教育を展開して、サービス利用を伸ばす方法は、Googleでも使われており、教育資料をネット上で展開している。

上記より行うべき対処は二つある。一つ目は司書自体がデジタル機器を扱えること、また分からない場合は調べることができるよう教育する。そのためには定期的に、情報教育の勉強会を開くべきである。二つ目は学んだ知識を市民に教えることである。市民が気軽に参加しやすい雰囲気や環境を作ることが図書館であればしやすいと考える。以上が私が考える課題と対処である。

(Y)

図書館にはまだまだ利用者のニーズに応える力があり、利用促進に注力すべきと考える。

資料電子化やサービスのオンライン化により、図書館不要論が出ている。この課題を解決するためにも、場としての図書館を活かした取り組みが有効である。具体的には、例えば、オンライン会議等に用いるソフトの実践講習によるデジタルデバインドの解消が挙げられる。

コロナ禍を受けて、オンライン会議等に用いるソフトを利用する機会は格段に増えたが、それを利用することが初めてだという人は多いだろう。ネットなどによって独学できるかもしれないが、公的施設として信頼されている図書館という場で、学習希望者が実践する方がより良い場合もあり、費用も安価になるはずである。

具体的には参加者が集まって、各一台パソコンを使い、講師役の図書館員にソフトを通じたブックトークなどをやってもらうのが良いと思う。ブックトークであれば、スライドもラ

イブも使用するのに不自然はなく、図書館の蔵書も紹介できる。ブックトークをする図書館員はリモートにし、参加者のサポートを行う職員を別にしても良いだろう。

課題として、パソコンの購入費が上げられるが、自治体としても住民がITリテラシーを身につけ、より良い社会経済生活ができることを期待しているはずであるから、予算の獲得も不可能ではないはずである。また、ソフトを扱うことが出来る図書館員が必要であるが、最近は大学の授業や司書講習も、ソフトを利用してオンラインで行われることが珍しくなく、司書有資格者を採用すれば足り、職員に占める専門職員の割合も増やすことができ、全体のサービス向上も期待できるのではないだろうか。

(宇江 拓馬)

近年、電子媒体の急速な発展により、資料の電子化・サービスのオンライン化がされ、図書館の「館」としての必要性が問われている。しかし、図書館は「場」としても、重要な役割を担っていると授業にて学んだ。

これを踏まえ、私が図書館員になれた際は（本を借りてもらうことが理想だが）本を借りることを目的としない人にも、「図書館に来たい」と思ってもらえるような環境作りをしたい。私が小さい頃から通っている図書館は、その場に行くとも明るく開放的な空間があって、本を借りなくても、歩き回るだけで楽しく、わくわくさせられていた。そのように利用者にとって過ごしやすい空間の中で、本に興味を持たない人も呼び込めるイベントを考案したい。

例えば、（既にあるが）赤ちゃんに対する「ブックスタート」であったり、乳幼児に対する「読み聞かせ」に始まり、幼稚園教諭として働いていた経験を活かした「子育て相談ブース」を設けたり、それを発展させて「ヤングアダルトや大人も来れるお悩み相談ブース」のようなものがあったとしても良いと思う。本を借りに来たついでに寄ってみようかと思ってもらえたら良いし、相談ブースに来て紹介した本を借りてくれれば図書館としてのサービスも提供できる。既に紹介された図書館では様々な機関と連携して来館者（貸出）を増加されている所もあったが、私の地元の図書館ではされていなかったため、私が主となって考案してみたい。また、高齢者などインターネットが苦手な人も気軽に来れるような「一緒に楽しくインターネット（スマホ）講座」のようなものがあったとしても良いと思う（デジタルデバインド解消、小さいときは青少年自然の家の方が来てくれて「飛び出し絵本」を作ったのがとても面白かった！）

このような機会に触れてもらうことで、本に対して少しでも興味を持ってもらって「明日も図書館に行きたいな」と思ってもらえるように、環境整備はもちろん「場」として好きな空間となるよう注力する。潜在的な要求を図書館という場所に関わることで（本を読むことでも）満たせられるようレファレンスサービスについてもアピールして、全住民が地元で「オススメの場所」と紹介してもらえる空間作りをする。

(大谷 かりん)

私は場所としての図書館作りに注力すべきだと思う。現在オンラインでの情報提供が盛んになりつつあるが、図書館に来館し、ブラウジングすることによって思いがけない資料の発見などの体験も大切にしていきたいからである。また、もちろん図書館として利用者に本を読んで欲しい気持ちはあるが、居場所がない人にとって安心できる場所作りも行っていきたいと思う。例えば現在日本では交友関係や親族との関係が希薄な高齢者が多いという。そういった層の方たちが来館することで、交友関係を築くまでとはいかないが、長時間いても何も言われぬ・人目を気にせず人のいる場所を提供することができるのではないかと思う。

そのためには「図書館は誰でも歓迎する。本を読まなくて良い」といったことを知ってもらわなければならない。高齢者を例に挙げたが、どの年代、どんな人にもこのことが伝わって欲しいため、ホームページやSNS、掲示板など様々な媒体を使用していきたい。

また、居場所として図書館に来館している人たちにもやはり読書をして欲しいと思うので、読書通帳を取り入れたり、本の感想をポストに入れ図書館員がそれに対しコメントを書く文通のようなシステムを導入すれば感想を分かち合う喜びが、また本を読むきっかけになるのではないかと思う。

(山口 七海)

少子高齢化社会を迎え、この先も子どもが少なくなることが予想される中、社会全体で子育て支援をしていく考え方に変わっています。赤ちゃんに本をプレゼントするブックスタートを取り入れている自治体もあり、赤ちゃんとお母さんが本を身近に感じる機会が増えていると感じます。そんな中、赤ちゃん連れに配慮するポスターを用意したり、赤ちゃんの時間を設けるなど工夫している図書館もありますが、まだ図書館を利用することを躊躇うお母さんは多いと思われます。なぜなのか考えられる原因は、

①図書館は静かにしないといけない。子どもは迷惑をかけていると思ってしまう。

(社会全体が人に対して厳しくなっている側面もあると思います。)

②子どもが本を大切にできない。

③子どもの機嫌がいつ悪くなるのか分からない

④お母さんが忙しい。

など図書館を使いづらいと感じてしまうためと思われます。

そんな親子が気軽に利用できるように、赤ちゃんの図書スペースに近い場所に赤ちゃん専用の入り口を作る、また小さくて良いので図書スペースから直接アクセスできる庭を造ったらどうかと考えます。赤ちゃんの時間に合わせて出ることが難しい親子もいると考えられます。その時間に行けない時、赤ちゃん専用の入り口があれば、赤ちゃん連れが気になる他の利用者さんの目が少し気にならなくなると思います。また庭があれば赤ちゃんの機嫌が悪くなれば、外に出て気分転換させることもでき、お母さんとしても安心できると思います。入り口を分けることや庭があることで、他の利用者との住み分けもでき、誰もが利用しやすくなるのではないかと考えます。また、子育てばかりのお母さんが、子育て以外の情

報にふれることができる図書館は魅力がたくさんあると思います。子育て支援はもちろん、お母さん支援もできる図書館をめざしたいと思います。

赤ちゃんから図書館に親しみ、利用することでしょうし、大人になっても図書館を利用すると考えられるので、赤ちゃんから利用できる図書館が増えると良いと思います。

(幸野 敬子)

公立図書館の持つ課題の一つに、その地域全ての住民に対してサービスが提供されているかという問題がある。

例えば、図書館に来る時間がない人や、中高生などの若い世代や、本の衛生面が気になる人など、様々な理由でサービスを受けていない人たちに対し、これまで返却時間の延長や返却ボックスの設置、ダンスイベントの開催等で図書館にまず来てもらう、その他、本のクリーニングボックスの設置などサービスの向上、利用者の増加に向けて取り組みがなされている。

しかし私は異文化・他言語を持つマイノリティの方に対する取り組みが少ないのではないかと思います。図書館の蔵書には「外国語で書かれた本」というコーナー、書架があるがその場所を示す案内板が日本語だけであったり、又、図書館のホームページにも日本語表記しか無いものが多いと思う。まずはホームページ上で他言語での説明・案内を適切に行い、館内表示についても誰でもわかるやさしものに変えていく必要があると思う。

(堀 義行)